
キオクノキカイ

ハチミツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キオクノキカイ

【Nコード】

N62840

【作者名】

ハチミツ

【あらすじ】

自分の将来や両親との関係に悩むアヤメは、ひよんなことからUSBの記憶の世界に迷い込む。読んでいただければ幸いです。

プロローグ

「ちよつとお、アヤメ！何辛気臭い顔してんのよ。」

昼休みに考え事をしながらカッターで鉛筆を削っていると、裕子ゆうこが僕の机に弁当を叩き付けるように、ドン、と置きながら言った。

「てかさ、なんで昼休みに鉛筆削ってんの…。」

ゴミ、下に置くわよ。一緒にお昼食べよ！」

僕は仕方なく制服のブレザーのポケットにカッターをしまってた。言った。

「ああ…、ごめん。今日、お昼忘れちゃった…。」

「ええ、昨日でもでしょ！…もしかして、まだお母さんと喧嘩してるの？」

僕は遠慮がちにうなずいた。

「そんなの早く謝っちゃいなよ。そのほうがずっと楽だって」

裕子が心配そうに僕の顔を覗き込んだ。

彼女が僕のことを心配しているのは分かるが、僕にはそうする気は毛頭ないのだった。

「私、謝らないよ。…別に悪いことしたわけじゃないし」

「それは分かってるけどさ…」

あ、とりあえず私のお弁当食べなよ！何か食べないの元気でないって！」

「いい、もういいよ。もう帰るから」

僕はそう言って席を立つと、鞆を持って教室を出ようとした。すると裕子が呼びとめる。

「アヤメ！何か：悩みとかならさ、相談に乗るからね。力になれるかは、分かんないけどさ」

「うん、ありがと…。それじゃ私、早退届出してくるから。」

僕と裕子は、互いにさよならを言った。

早退届を出し終えた僕は、靴を履き替えるためにげた箱を開けた。

僕の使っているげた箱は他よりも戸が固く、いつも機嫌が悪いみたいだった。

かなり力を入れて戸を引っ張らないとあいてくれない。

今日も、左手でげた箱が倒れないように押さえて、右手で力いっぱい戸を引っ張った。

ガコン、と げた箱が開き、中から反動で何かが落ちてきた。

靴の上に乗っていたものが滑って落ちたのだろう。

僕はそれらを拾い上げてよく見てみる。

「バッファロ：オの：USB？、と、手紙？」

それは手紙というよりは、トランプくらいの大きさのカードという
ほうが正しい。

そのカードには、女の子が書く文字みたいな丸文字で、ぎゅちりと
こう書かれていた。

「初めまして、アヤメさん。

キカイのキオクを開いて、それから会いましょう。

何があっても、見失わないで」

何なんだろう、これは…。気持ち悪…。

僕にはこれが、新手のラブレターかスタンド攻撃のように思えた。

プロローグ(2) (前書き)

プロローグはここまでです；

プロローグ（2）

人間とは不思議なもので、正体が分かっているものに対してはあまり恐怖を感じない。

たとえば、夜の墓場に黒い影があったとしよう。

それが何か分らないと、幽霊だの何だのと何かと嫌な連想を始めてしまう。

しかし、正体がただの木だと分かっしまえば、なんてことはない。なんだ、こんなものだったのか、と興味もなくなるだろう。

僕は自室に入りベットに横になると、

さっそく枕元に置いてあるノートパソコンを起動させて、先ほどのUSBを差し込んだ。

ウイルスの検索に引っかけられなかったので、USBにひとつだけあるデータ、圧縮ファイルというものを開くことにした。

僕はパソコンのことはよく分からないが、とにかくこれは何かを圧縮したファイルなのだろう、と思った。

ほどなくして、僕のパソコンが音をたてて頑張りはじめた。

しかし、ウイルスでもなければ、誰が何のためにこんなUSBを僕に送りつけてきたんだろう。

ラブレターだったらどうしようと妄想し、一人で断わり方を考えている自分に気付き、恥ずかしくなり赤面した。

パソコンの画面を見ると、いつの間にかたくさんのウィンドウが開いていた。

（なんか勝手にいっぱいウィンドウがでてて恐いんだけど…
やばいのかな、コレ？ちゃんと情報の授業受けるんだった…）

僕はもうしたらいいのか分からずに、ただそわそわとパソコン画面を眺めていると、

その中心に一つのウィンドウがパツと開いた。

「ようこそ」

僕はウィンドウにそう書かれているのを見た。

そして、だんだんと意識が遠くなるのを感じ、眠りに落ちるように目を閉じた。

日記 9月8日

放課後、

担任から進路についてご両親と相談するようにと言われたけれど、私はそうはしなかった。

夏休みの明ける前の日に一度だけ、母とこのことについて話したことがあったからだ。

たしかその日は夜になっても暑く、夕食に冷やし中華を食べながら私は言った。

「母さん、私、進学先のことと相談があるんだけど…」

何かを食べながら話すのは少し行儀が悪いと思ったが、こういう話は何かをしながらではないと難しいと思う。

「どうしたの、急に？」

「私…将来は絵を描く仕事がしたいみたいだから…」

高校卒業したら、

K美術大学に行きたいなー…って思ってたりするんだけど…」

この後に母から言われたことはあまり思い出したくない。

母は私を笑いながら、綾菜あやながそんな所に入るなんて、

宝くじを当てるよりも難しいわ、とか何とか言っていたと思う。

母はどうして私にあんなことを言ったのだろうか？

母は私が女だから、私を家から出したくないと思っているのは薄々

感じていた。

でも、どうして笑ったんだろう？

私はそんなに可笑しいことを言った？

担任のせいで嫌なことを思い出したし、

すぐ腹が立って、今日は家に帰りたくなかった。

結局夜には家に帰ったけれど、母さんと話す気にはなれなかった。
夕食を食べ終わるとすぐにこの日記を書きに自室に閉じこもった。

旅芸人

背中が湿っているのに気がついて、
僕が大きな木に背中をもたれて座り込み、眠っていたことに気付いた。

「なに、ここ…、どこ？」

あたりは見渡す限りの原っぱが広がっていて、
数十メートル先には大きな城のような建物が見えた。

よくロシアやウクライナなんかにあるような、丸くて先のとがった
屋根のついた城…。

僕はそこから立ちあがって、更にあたりの様子を見てみる。

大きな川、といっても流れの急な日本風の川がすぐ近くを流れてお
り、

丸太でできた橋が危なっかしくかかっている。

夕日なのか日の出なのか、太陽が地平線の近くにあった。

しばらく僕は茫然としていて、

まるで夢みたいに美しい景色を眺めていた―（実際に僕は夢だと思
っていた）。

僕は身長がどちらかというと低めなので、城とか景色とかを見ると
首が痛くなる。

今回もそうだった。

僕は首が痛くなった時は、上をむいたり下をむいたりして体をほぐ
すようにしている。

僕がうんと顔を上にあげて、それからぐつと下をむいたとき、自分の足元に見覚えのあるカードが置いてあることに気付いた。僕はそのカードの文面を読むと、怒りにも近い苛立ちを覚えた。

「お初にお目にかかります、アヤメさん。
出会えたことを嬉しく思います」

カードの裏にも文字が書かれていた。

「あなたはこれから旅をすることになると思いますが、
そのたびが楽しくなることを祈っています」

なんて勝手なんだ…。

僕はそのカードをビリビリに引き裂いてからはだしの足で踏みつけ、それから、絶対旅には出てやらないと心に決めた。

旅芸人2

どうして僕ははだしなんだろう？

僕は自分の服装を確かめてみた。

ブレザーの制服、靴下は履いていない。

これは僕が部屋にいたときの服装と同じだった。

やっぱりUSBのフォルダを開いたから、こんなことになってしまったんだろうか…。

そうだ、と僕は思いついて、上着のポケットに何か入っていないかな？

右のポケットには、ロッカーのカギ、ポケットティッシュ、それから左には、カッターナイフと小銭が数百円、携帯電話が入っていた。

携帯電話、こんなものがあっても電波とかはないんだろうな、と思いつつも、試しに開いてみる。

「あ、れ…、何か電波あるよ…」

電波は何故かしっかり3本立っていた。

どうしてだろう…。とりあえず裕子に電話かけようかな。

僕は裕子の電話番号を探して、発信した。

すると、すぐにいつもの裕子のどなり声が聞こえてきた。

「ちょっとちょっとアヤメェー！！」

親友に内緒で家出なんて、いい度胸してるじゃないですかー！！

てか、あんた、いまどこにいのよー!!」

「家出するつもりはなかったんだよ。でも今よく分かんないところに」

途中で裕子に遮られた。

「どこー!心配してんだから答えなさいよー!」

「だから、私にも分かんないの。部屋で寝てたらよくわかんないところにて…」

「…え、ちょっとそれ、マジ話?マジで大丈夫なの?あんた生きてる…?」

生きていないのにどうやって電話ができるのか、と言い、それから、僕の家の様子を知っているかと裕子に尋ねた。

「え、うんとね、えーっと…その、アヤメのパソコンの電源がついたままだった」

「他には?」

何故か焦ってしまって、つい口調がきつくなってしまう。

「…アヤメのお母さん、泣いてたよ」

僕は母さんのことが聞きたいわけではなかった。母さんのことをあまりよく思っていなかったし、最近と同じ家にいるのほとんど口も利かない状況だったからだ。

ここにきてしまう前にパソコンをしていたせいか、
今になって目がひりひりしてきて涙でにじんだ。

「そう…。でも、私が聞きたかったのは、
そのパソコンにUSBがささってなかったかってことなんだ」

「USB？ そんなのなかったよ？ なんで？」

USBがなかった？ どうしてだろう？ 誰かが抜き取ったのか？
なんにせよ、USBが見つからないのであれば、
裕子や、そのほかの人達にもこの現状を把握してもらうのは難しい気がする…。

「実は信じられない話、みなれないUSBをパソコンで開いたら、
別の世界のようなところに行ってしまったと…」

「…はあー？！ アヤメあんたね、居場所がばれたくないからって
すぐばれるような嘘つかないでよ、あんたには心底失望したわ！」

そう言い終わるやいなや、裕子は電話を切ってしまった。
と、それからまだほとんど間の開かないうちに、また裕子から電話
がかかってきた。

「その話、信じてあげてもいいけど、写メおくんない、写メ！
スライムの写メよ！ 分かった？！」

あと…電話が通じる世界なら、お母さんにも連絡しなさいよ！」

裕子は要件を言い終わるとすぐに電話を切った。
裕子の言いたいことは痛いくらい分かる。
けど、何日も口を聞いていなかった母さんと、

いったい何を話せばいいのだろうか？

さて、これからどうしようか。

裕子に何とか助けてもらうのは無理そうだ。

僕はこのままこの木の下にいたら飢え死にして死んでしまうだろう。かといってあの城に入って行ったらどうなるか分からない。言語の壁もあるかもしれないし…。

よし、決めた。消去法で城に行こう。

成り行きにまかせて、まずは城門の前にいる兵士風の男に城に入れてもらえるように言ってみよう。

もし何か怪しまれたら、走って逃げればいい。

僕は走るのはあまり得意ではないが、きつと鎧で固められた奴よりは速く走れるだろう。

旅芸人3（前書き）

ウサギって、最高でどれくらいの大きさのがいるんでしょうか？
食用とかなら、かなり大きいサイズのもいそうですが…

旅芸人3

僕は城を見上げて、裕子の言ったことを思い出した。

「スライム、か…」

城門の前には、二人の兵士風の男が退屈そうに突っ立っていた。一人は、何かが下りてくるのを待っているように、宙をぼんやりとみている。

もう一人は、遠くのほうを見ていた。

何を見ているのかと目線を追ってみると、茂みの向こうに一羽のウサギがいた。

否、ウサギではない。それにしてはなんだか大きすぎる。

それはちょうど、キツネとか、狼とかの大きさをしていた。

その生き物を横目に、勇気を出して二人に話しかけてみる。

ことばが通じなかったら全力で逃げよう、と頭の片隅で思いながら。

「あのー、すみません。このお城に入りたいのですが…」

宙を見ていた男が、こちらをじろじろと眺めながら無愛想に答える。

「は?…何だって?」

僕はことばが通じた喜びよりも苛立ちを覚えたが、さっきよりも大

きな声で同じことを言った。
するとその男はもう一人の男に面倒を押しつけるように小声で言った。

「こいつが城に入りたいんだと。どうする？」

ウサギー（のような生き物）を眺めていた男は、
急に話しかけられて驚いたという顔をし、それから僕に話しかけた。

「君、その恰好を見ると、最近ここに呼ばれた旅芸人だろう。
それなら入ってもかまわないよ。」

しかし、どうして靴を履^はいていないんだい？」

僕はとっさに自分の足元を見た。寒さで足が赤くなっている。

「えーつとですね、先ほど盗賊に襲われたので、靴を投げて撃退
したんです。」

盗賊は逃げて行ったのですが、その時靴は無くなってしまつて……」

これは僕がとっさに考えたいわけだ。

自分でも、この言い訳はないだろう！と思つたが、
やさしいほうの兵士はこんないいわけにも笑ってくれた。

「ハハハ、靴くらいなら、宿屋の奥さんが喜んで仕立ててくれるだ
ろう。」

この国は旅芸人には親切なんだ。君の職業について話せば、タダ
同然で泊めてもらえと思う。

宿屋なら、入ってすぐ右だよ。
今年も楽しませてくれよな！」

僕は芸などマリオカートぐらいしかなかったが、
とりあえずお腹がすいていたし、とても疲れていたの
で、
ここでしばらく休んでいこう、と思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6284o/>

キオクノキカイ

2010年12月19日01時44分発行